

郷土史への扉

春先から初夏にかけての山菜という  
と、ワラビ・タラの芽・タケノコなど  
があり、山菜取りを楽しみにしている  
方も多いのではないだろうか。

中でもタケノコは、種類ごとに次々と芽吹いて食卓をにぎわせてくれます。

今回は、鹿児島で昔からタケノコの中で一番おいしいといわれ、ダイミョウダケの発祥の地ともいわれる「台明寺」と、ダイミョウダケで作られた笛「青葉の笛」について2回シリーズで紹介していきます。

# 台明寺と青葉の笛

その①

## 一、台明寺の位置

台明寺は国分平野の郡田川をさかのぼった台明寺溪谷一带にありましたが、明治初めに「廃仏毀釈」によって破壊され、今では石造物などの一部が残っているのみです。

台明寺の位置については、『<sup>※2</sup>台明寺牒』(一二四〇)に「鬼氣を禦がんが為、国衛の丑寅の方において、鎮護国家の

道場を建て置く」と書かれています。

要約しますと、大隅国の政庁の中心であった国衛の丑寅(東北)の方向から災いが来るとされているので、それを防ぎ、大隅国が繁栄できるように台明寺を建てた、ということになります。これは、古代中国から伝わった「風水」に基づいた思想です。

『鹿児島県史』にも、「平安時代に比叡山に倣って、国衛鎮護の道場として創建されたのが台明寺だろう」ということが書かれています。

## 二、台明寺の創建

台明寺の創建時期については、今のところはっきりしていません。古文書

には、正嘉元(一二五七)年に台明寺で新しい鐘を作り、その鐘の銘文の中に「天慶九年の頃の古い鐘があつて、その小さな鐘を鑄改した」ということが書いてあります。天慶九年は九四六年なので、これが真実であったとすると、十世紀半ばには台明寺があつたことが分かります。

しかし、大隅国を鎮護するための道場として、台明寺が造られたのかというところではなく、それよりもさらに



台明寺跡



日枝神社鳥居

前の歴史がありました。台明寺跡の近辺に行きますと、豊富な湧水群(滝も含む)と険しい断崖があり、ここには多くの洞窟があつたと思われまふ。その洞窟の中の幾つかが、修験者たちの信仰を集めるようになり、それが「霊窟」といわれるようになったようです。

## 三、聖域としての台明寺

では、いつごろからこの地が宗教的な聖域となつたのでしょうか。寺院内にあつた日枝神社の創建については、『神社明細書』の中で、弘文元(六七二)年と書いてあります。しかし、大隅国の建国は和銅六(七一三)年で、当時はまだ日向国の一部であり、朝廷に反発を持った隼人の影響が非常に強い地域でした。朝廷側の神道や仏教の考え方が早い段階から伝え広まってきたの

は考えにくいことから、おそらく、大隅国建国の前後には宗教的な地域として使われていたのではないかと思われます。

このように、台明寺域は当初は修験者たちの修業の場である霊窟として、台明寺が創建されてからは鎮護国家的な性格の寺院としてその役目は変わってきました。

今、台明寺跡を見渡すと全くその面影がありませんが、十五世紀半ばには「<sup>※4</sup>三十四の房があつた」と記録が残っていますので、当時は大変大きな寺院だったということが想像できます。

これから、台明寺溪谷は若葉の鮮やかな季節を迎えます。当時の台明寺の面影を思いながらの散策はいかがでしょう。

(文責 川谷)

※1 寺院などを壊し、僧尼や寺院が受けていた特権を廃すること。  
 ※2 律令制(古代)における公文書のひとつ。  
 ※3 神仏を祭った岩屋。神仏の宿る岩穴。  
 ※4 僧侶と弟子が修行・生活する建物。